

令和6年度第1回佐久市スポーツ推進審議会 会議記録

日 時：令和6年5月22日（水曜日）

午後7時00分から午後8時30分

場 所：佐久市役所 南棟3階会議室

出席者：佐久市スポーツ推進審議会委員9名

事務局（教育長、社会教育部長、スポーツ課長、スポーツ課職員）5名

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

（1）第二次佐久市スポーツ推進計画について（資料1）

事務局 資料1により説明

委 員 令和3年度のアンケート調査回答状況は1000件中427件で、年代別に見ると、10代～30代の回答数が少ない。今回インターネットを使うということだが、本当の意味での実施率や意見には繋がらないので、まずは回答数を増やすことが必要。郵送との併用などの手段により、ある程度の年齢は割り振った中で回答数が返ってくるような形を取るのも一つだと思う。

事務局 市でも色々なところでアンケートを行っているが、回答率を上げるのは非常に難しい。市としてもDXの推進をしている中では、紙での回答の打ち込み作業も省力化の意味でも今回取り入れてみたいと思っている。また本計画は令和8年度までの期間なので、その時には郵送とデジタルとの併用による回収率向上も考えたい。

（2）佐久平ハーフマラソンについて（資料2）

事務局 資料2により説明

委 員 昨年、給水所のボランティアをしたが、第一給水所はすごく混み、準備したコップをなぎ倒しながらランナーが通っていくといった様子になる。給水所の幅を広げる、道路の両側に設けるなどを考えた方がいい。

事務局 運営の方で、やり方をよく検討していく。

（3）佐久市立中学校の運動部活動の地域移行について（資料3、4）

事務局 資料3、4により説明

委 員 継続的に部活を地域移行していく上で、予算はすごく大事になる。参加者か

ら受益負担ということで月謝が3000円から5000円ぐらいの間が妥当とアンケートにもあったが、基本的には毎年、地域移行に向けての予算を市が確保していく状況を作りながら、受益負担を合わせていくべき。

事務局 佐久市では、受益者負担を基本に考えており、各お子さんのご家庭に負担をいただくのが原則。しかし、アンケートにもあるように、あまり高額になると負担ができない家庭が出てくる。地域移行の方針を打ち出したのは国で、国に基づき県も方針を出してきている。これは全国的な動きなので、国がこのような方策を出すからには、応分の費用補助などを求めていかななくては行けない。最終的には国の方の判断となるが、少しでも保護者の負担の方も軽減できるようにと考えている。クラブにより必要な指導者人数も異なるので、月謝を一律にするが良いのか悪いのかも、これから議論しなくては行けない。機会の公平性を一番大事に考えながら議論していきたい。

委員 アンケート調査で、これから対象になる小学生・中学生のご家族やご本人が、まだ2割は部活動の地域移行をあまり知らないということに驚いた。この方たちに対してのアプローチは部会などでの対話を通じてということだが、その部会自体はもうあるのか。

事務局 具体的な組織はこれからだが、その前段としてのモデルケースとして剣道において議論を進めていただいている。現在作成を進めている方針（素案）がきちんとできたところで、改めて市民の皆さんにパブリックコメントを行い、ご意見を伺ってまいりたいと考えている。

委員 この審議会とは別に、市立中学校長と各クラブなどの集まっている協議会でも話し合いをしている。難しいところが多いが、持続可能である状況を作ることが一番であると感じている。例えば、平日部活動の地域移行をする場合、地域の人たちに入っていただくとする、時間は午後6時から8時といった形にすることが必要で、さらに毎日ではなく部活動によって週2回2時間とする、もしくは平日はなくすといった発想の転換をしていかなければ、持続可能にならない。また予算の面に関しても、アンケートでは許容月謝金額が3,000円ぐらいとなっているが、今の部活動は年間で多分3000円ぐらいなので、今後は年間だと10倍ぐらいに上がるということになってしまうので、ユニフォームに支援企業のネームを入れるなどといった形で、地域に助けていただき、さらに国の補助金などもうまく全部活用しながらやっていく。部活動の意義の関係もお話をいただいたが、中学校の部活動は3年間しかない。この仲間たちと一緒に何かやり遂げる、勝負の勝ち負けは別として「自分に負けない」という非認知能力を大事にしながら、私は部活動指導をしてきた。厳しいことを学びながらやっていくことが部活動かなと思うので、そう言った趣旨と生涯ということに関しては、ちょっとずれがあるかなと感じている。

委員 地域というのは中学校区を一つの地域と考えるということか。中学校区は越えて佐久市全体で考えるとすれば、資料に剣道のモデルがあるが、4校からメンバーが集まってきて、そこで団体を組んで団体戦の試合に出るということか。

事務局 全体というのは意味合いが難しいが、佐久市全体の子供たちをいっぺんに集めようとする競技もあると思う。女子バレーやバスケは、市立中学校全てにあるが、それを普段中学で一緒に活動している生徒たちをバラバラにしてやるのが、いいのか悪いのかという議論があると思うので、競技ごとの部会の中であるべき姿を議論していただきながら進めていくような形になる。

委員 私は陸上に携わっており、クラブには小学生から中学生までいる。陸上部は大きな学校にしかなく、既にクラブチームと部活動の方と両方を兼ねている子がおり、これからは選手の取り合いになっていくだろう。特にチーム競技は、学校の中で上手な子はもう小学校の高学年からクラブチームの方に行っている状況。その受け皿の一つとして協力したいと思うが、自分のクラブに入ってもらえるのか、クラブの子はクラブの子で、部活から来る子と一緒に活動するのか。

事務局 子供の数は、どんどん減ってきている。その中で持続可能ということになると、それぞれの競技に今まで通りの人数が入ってくることはなかなか難しい状況が自然に生まれてくるので、各競技の選手の裾野を広げていくのは、競技自体の振興という面でも非常にこれから大事なことだと思っている。クラブチームに入ってやるのか、今回の部活でやるのかっていうことは最終的には、子供さん、もしくは親御さんが何を望むかによるかと思う。クラブに入って大会で優勝を目指すのか、仲間と楽しみたいのかなど、個人の判断になっていく。

委員 スポーツ庁、文科省の方向性は令和4年に出たガイドラインから変わっておらず、本当に漠然としたまま。具体的な方法を示していかないと、それぞれの地域、市町村ではなかなか難しく、取り組みも前に進んでいかない。地域移行に関しては、大会運営なども併せて考えなければならず、現在は中体連に所属している学校の先生方を中心とした中体連の役員の人達が大会運営を進めている。地域の競技団体等の応援もいただきながらやっているが、ノウハウは中体連に所属している先生方が持っていて、これを地域に移行してもすぐできるというものでもない。今は土日を地域移行しようということだが、土日はすでに中学校も高校も大会が始まっており、従来と同じような形でやっていこうとしたら非常に難しい。我々も含めて行政の皆さんも国・県にその辺のところはしっかりと働きかけていかないと、先の展望がないのかなと思う。

委員 地域移行を進めていく上で指導者は必要であるが、具体的にどのくらいの部活動数なのか出てこない、その指導者の必要人数などが出てこない。指導

者としては、教職員や退職教職員といったスポーツに長けた方々が望ましいと思うが、本当に人が集まってくるものなのか一つ疑問。例えば大学生は、主の指導者にはなり得ないかもしれないが、補助的な役割ならできるのかなと思う。どういう条件が揃えば、そういう指導者になれるのか。必要な人数など条件が整えば、協力できるかもしれない。

事務局 全国では大学生が指導者になっている事例も多く、補助という形であっても参加していただければありがたい。指導体制については、各競技で違うところもあり検討中であるが、お手伝いいただけるようであれば、ぜひお願いしたいが、方法については今後検討していければと思う。各競技に精通した方だけでなく、お手伝い・補助といった方もこれから非常に重要な役割になってくる。

委員 どんな家庭の子でも参加できるのかという「平等性」を一番に考えている。これからの教育の中での平等性についてはすごく気になるところで、部活動が地域に移行されたときにどれだけ重要視されてくるのか。最終的にはどこもやりたいスポーツができて、しかも楽しめること。「どの子ども」というところがすごく大事にされて、地域移行されるのが一番で私としても願いたいところ。

委員 バレーボールは生涯バレーと言われており、ママさんバレーでは佐久市で最高齢 89 歳の方もやっている。一生続けられるものであり、結婚してどこの地区に行っても、仲間ができるということがメリットかなと思っている。今はどこの学校にも大体バレーボールがあるが、少なくなりつつある。ママさんバレーは 9 人制であるが、6 人制のバレーボールもなかなか 6 人が集まらないと聞くので、遠くの学校で合同となると親御さんの送迎が大変だなと思うが、今のご時世は自分の車で子供がやりたいと言えば連れて行く、そういう時期なのかなと感じている。

委員 地域移行により、今の部活動の中で適応できないなお子さんが、さらにスポーツから遠のいてゆくような形になることを懸念している。アンケートを見ると、バドミントンなど設置のない種目が、実はニーズが高いという結果もあるので、地域移行する場合に既存のスポーツ種目ではなく、新しくニーズのあるバドミントンというようなものを作れば、そこに集まってくるようになると思う。地域移行するには、発想の転換で現在ないものを作り出す方が、実は簡単にできてしまうこともあるのかなと思うので、今掲げてある種目以外のものも立ち上げて、またそういうところに障がいのある方とかが少し入っていけるような体制になれば私達関係者は嬉しい。

委員 私達のところでは軽スポーツ教室を毎年やっており、そこでは、バドミントンがもうできないようなメンバーも、今流行りのモルック、ポッチャ、ピッ

クルボール、ワンバウンドバレーなど、みんなで楽しんでいる。私達は小学生用のビニールボールでバレーをやるが、人数が少ないときは3対3でもできる。年を取って若い頃のように動けないが、ちょっとルールを変える、ちょっと人数を変えることでできてしまうのが、ニュースポーツ、軽スポーツ。そのようなものも、地域移行でいろんな種目をやる中では、入っていける分野なのかなと思う。そうすると、長年やっているメンバーたちが中学生や小学生等に提供ができるので、いろんなやり方を発想の転換でやっていくことが必要なかなと改めて感じている。

委員 私は、軽井沢のアイスホッケーのクラブをやっているが、軽井沢中学校のアイスホッケー部が去年なくなり、そのアイスホッケー部の子たちが全部うちのクラブに来た。問題は指導者で、先ほど非常勤で手伝えばいいというお話があったが、実際はチームなのでその試合に出る出ないは非常に大事で、他のコーチが来て違うことを教えていたりすると、他の優秀な子や親から色々意見が出ることになってしまっている。学校部活動の場合には、そういうことはあまりないが、クラブの場合は非常に保護者の意見が強い。マイナーなスポーツなので、存在自体が非常に大変で、年会費以外に月に1万円、さらに遠征などもあるので、お金をどのくらい補助するかというのは、一番問題になってくるのではと思う。また、保護者の立場が強くなってしまうので、学校部活動とはちょっと違うのではないかな。地域移行はかなり大変だとは思いますが、協賛を募ってユニフォームを作るなど、社会を巻き込んだ行動に出ることができるのではないかなとは思っている。

#### (4) その他

事務局 委員の任期及び改選について説明

#### 4 その他

#### 5 閉会